

AOKI
Shigeru
Myth, Sea
and Love

よみがえる
神話と芸術

土 月 繁

没後
一〇〇年

2011年 3.25^金—5.15^日 石橋美術館 | 5.27^金—7.10^日 京都国立近代美術館 | 7.17^日—9.4^日 プリヂストン美術館

久留米展

会 期	2011年3月25日(金)―5月15日(日)
会 場	石橋美術館 〒839・0862 福岡県久留米市野中町1015
交 通	福岡空港より西鉄久留米まで西鉄高速バスで約50分 JR博多駅よりJR久留米駅まで特急で30分、快速で40分 西鉄福岡(天神)駅より西鉄久留米駅まで特急で30分、急行で40分 JR久留米・西鉄久留米より西鉄バス「文化センター前」下車 久留米インターより車で5分
開館時間	午前10時～午後5時(入館は閉館30分前まで)
休 館 日	月曜日(ただし、5月2日は開館)
入 館 料	一般 1,000円(800円) シニア 700円(500円) 大高生 500円(400円) 中学生以下無料 ※()内は15名以上の団体料金 ※シニアは65歳以上 ※前売り600円
主 催	石橋財団石橋美術館、西日本新聞社、TVQ九州放送
後 援	久留米市、久留米市教育委員会、財団法人久留米文化振興会
協 賛	日本写真印刷
お問い合わせ	0942・39・1131 URL http://www.ishibashi-museum.gr.jp



京都展

会 期	2011年5月27日(金)―7月10日(日)
会 場	京都国立近代美術館 〒606・8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
交 通	JR・近鉄京都駅前(A1のりば)から市バス5番 岩倉行「京都会館美術館前」下車、 (D1のりば)から市バス100番(急行)銀閣寺行「京都会館美術館前」下車 阪急烏丸駅・河原町駅、京阪三条駅から市バス5番 岩倉行「京都会館美術館前」下車すぐ 地下鉄東西線「東山」駅下車 徒歩約10分
開館時間	午前9時30分～午後5時(金曜日は午後8時まで、入館は閉館の30分前まで)
休 館 日	月曜日
入 館 料	一般 1,200円(1,000円) 大学生 900円(700円) 高校生 500円(300円) 中学生以下無料 ※()内は前売り及び20名以上の団体料金
主 催	京都国立近代美術館、毎日新聞社、京都新聞社
協 賛	日本写真印刷
お問い合わせ	075・761・4111(京都国立近代美術館) 075・761・9900(テレフォンサービス:展覧会のご案内) URL http://www.momak.go.jp



東京展

会 期	2011年7月17日(日)―9月4日(日)
会 場	ブリヂストン美術館 〒104・0031 東京都中央区京橋1・10・1
交 通	JR東京駅(八重洲中央口)から徒歩5分 東京メトロ銀座線・京橋駅(6番出口)から徒歩5分 東京メトロ銀座線・東西線/都営浅草線・日本橋駅(B1出口)から徒歩5分
開館時間	午前10時～午後8時(日曜・祝日は午後6時まで、入館は閉館の30分前まで)
休 館 日	月曜日(ただし、7月18日は開館、7月19日は休館)
入 館 料	一般 1,000円(800円) シニア 800円(600円) 大高生 700円(500円) 中学生以下無料 ※()内は15名以上の団体料金 ※シニアは65歳以上、障害者手帳持参者はご本人と同伴者2名まで半額。
主 催	石橋財団ブリヂストン美術館
協 賛	日本写真印刷
お問い合わせ	03・5777・8600(ハローダイヤル) 報道関係お問い合わせ 03・3563・0241 URL http://www.bridgestone-museum.gr.jp



青木繁の生涯と 没後の100年



1882年(明治15)	0歳	7月13日、福岡県久留米市に生まれる。
1900年(明治33)	18歳	9月、東京美術学校西洋画科選科に入学。
1903年(明治36)	21歳	9月、白馬会第8回展に《黄泉比良坂》他を出品、白馬賞を受賞する。
1904年(明治37)	22歳	7月、東京美術学校を卒業。坂本繁二郎、福田たね、森田恒友と千葉県館山市の布良海岸に写生旅行に行く。同地で《海の幸》他を制作。 9月、白馬会第9回展に《海の幸》を出品。
1905年(明治38)	23歳	8月、長男幸彦(福田蘭童)誕生。
1907年(明治40)	25歳	3月、東京府勸業博覧会に《わだつみのいろこの宮》を出品し、三等賞を受賞する。 8月、父の廉吾が死去する。父危篤の報を受け久留米市に帰る。
1911年(明治44)		3月25日、福岡市の松浦内科医院にて死去。享年28。
1912年(明治45)	没後1年	3月15日-31日、東京・上野竹之台陳列館で「青木繁君遺作展覧会」開催。
1913年(大正2)	没後2年	4月、『青木繁画集』(政教社)発行。
1939-40年(昭和14-15)	没後28-29年	東京・青樹社画廊と大阪・青樹社大阪支店画廊で「青木繁遺作展覧会」開催。この遺作展の後、《海の幸》《わだつみのいろこの宮》などが石橋正二郎の所蔵となる。
1948年(昭和23)	没後37年	4月、河北倫明『青木繁』(養徳社)発行。 4月25日、福岡県三井郡山本村(現久留米市)の兜山(けしけし山)の山頂に青木繁の碑が建立される。
1966年(昭和41)	没後55年	1月、青木繁『仮象の創造』(中央公論美術出版)発行。
1967年(昭和42)	没後56年	6月15日、《海の幸》、重要文化財に指定される。
1969年(昭和44)	没後58年	6月20日、《わだつみのいろこの宮》、重要文化財に指定される。
1972年(昭和47)	没後61年	4月-7月、ブリヂストン美術館と石橋美術館で「生誕90年記念 青木繁展」開催。 10月、河北倫明『青木繁』(日本経済新聞社)発行。

100年前の春、一人の画家が28歳で世を去りました。青木繁です。1904(明治37)年、22歳のときに青木が画壇に投じた《海の幸》は、明治浪漫主義とよばれる時代の空気の中で、人々の心を力強くとらえました。青木のすぐれた想像力と創造力の結晶だったからです。さらに、青木は日本神話に題材をとった作品群を残していますが、その魅力は、時空をこえたかなたに見るものの思いを導くロマンティズムでした。一人の人間の苦闘や愛憎が一つ一つの作品に反映されています。油彩作品約50点、水彩・素描約150点、総数約200点の規模となります。

39年振りの大回顧展。

遺品の少なさから、これまで青木繁の回顧展はなかなか開かれてきませんでした。

最後の単独回顧展は、ブリヂストン美術館と石橋美術館で開かれた

1972年にさかのぼります。以来、39年振りの、主要作品を網羅し

た大回顧展です。青木の油彩、素描作品は、所在不明のもの

を含めて約440点だと考えられています。今回の展覧会

は、国内の多くの美術館、所蔵家のご協力を得て、その

およそ半数にあたる約200点を展出する空前の規模

となり、青木の全貌を見渡すのに十分なものです。

燦然とかがやく 名作たち。

《海の幸》、《わだつみのいるこの宮》(1907年、ともに重要文化財)をはじめとする青木の代表作品は、明治末期のみならず、日本の絵画史を代表する名作です。

日露戦争を迎えつつあった20世紀初頭の高揚する時代感覚、

青木自身のたぐいまれなイメージする才能、そして私たち日本人

が長いあいだに培った美意識が、青木作品のこうした位置付けを作り

あげてきました。100年にわたって愛されてきた名作たちを、この展覧会でご堪

能ください。



《秋》1908年、石橋財団石橋美術館

伝説に彩られた生涯をあきらかに。

青木の生涯は、経済的な不遇、健康上の不幸とその強すぎる自負心によって、恋愛や放浪生活の中で数々の逸話を生み出し、数奇な伝説に彩られています。それらは実像を歪めかねない魅力に溢れていますが、今回の展覧会を機に様々な調査、検証活動を行いました。その成果を展覧会の中で、書簡などの資料とともに紹介します。青木繁像がより鮮明に浮かび上がってくることでしょう。

この展覧会は、5章で構成されます。まず、青木繁の28年の生涯を4章に分けて、作品（油彩、水彩、素描など）と資料（書簡、書籍など）でたどります。さらに第5章では、没後100年間の評価の変遷を紹介します。

画壇への 登場

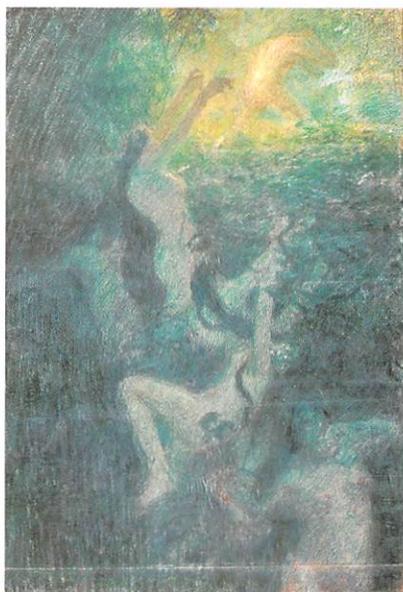
——丹青によって男子たらん 1903年まで

第1章

青木繁は、1882（明治15）年福岡県久留米市に旧久留米藩士の子として生まれました。1899年には中学明善校を退校し画家を志して上京、小山正太郎の画塾不同舎に入門します。翌1900年には東京美術学校西洋画科に入学、当時の同科の教官には黒田清輝、藤島武二らがいました。この頃より、上野の帝国図書館に通い、古事記、日本書紀をはじめ諸国の神話、宗教に関する、あるいは舶載図書によって西洋の古典や最新の美術動向に関する知識を養います。青木が画壇へのデビューを果たすのは美術学校在学中の1903年秋に開催された白馬会第8回展のことでした。同展に青木は神話に取材した作品群を出品し、この年の白馬賞を受賞します。



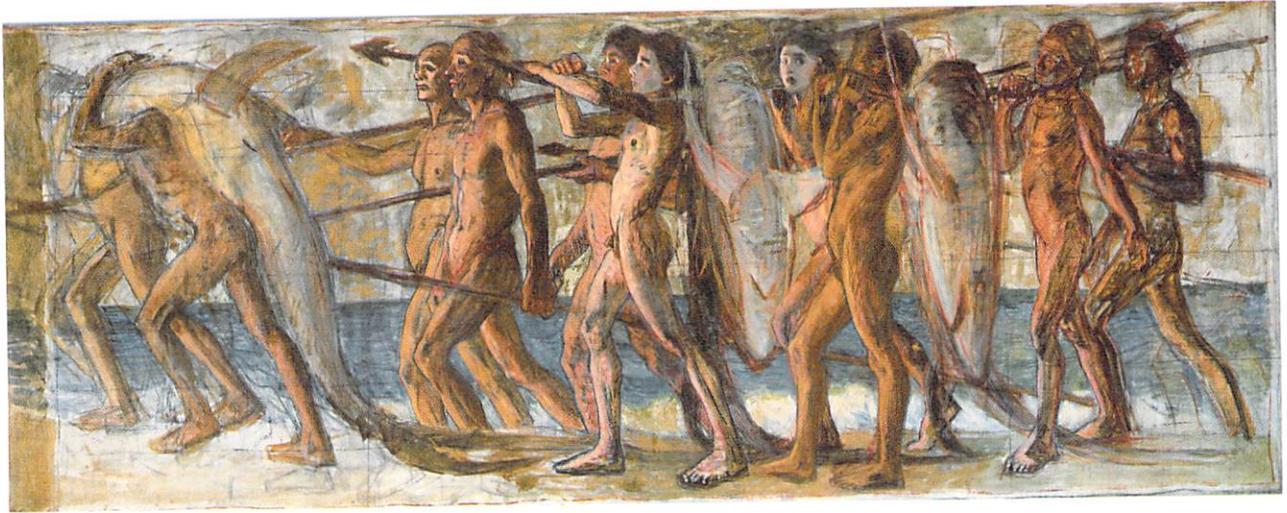
《自画像》1903年、石橋財団石橋美術館



《黄泉比良坂》1903年、東京藝術大学（京都展、東京展のみ）



《妙義山金洞第一石門》1902年、個人蔵



《海の幸》1904年、石橋財団石橋美術館、重要文化財

第2章

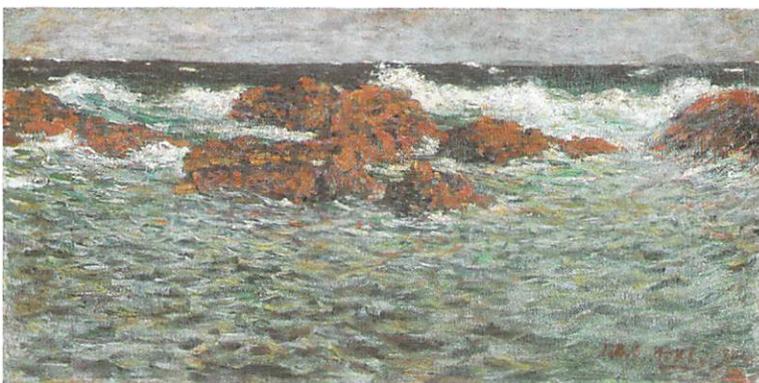
豊饒の海

——《海の幸》を中心に
1904年

1907(明治37)年7月、東京美術学校を卒業した青木繁は、友人の画家・坂本繁二郎、森田恒友、恋人の福田たねと4人で房州布良(千葉県館山市)を訪れました。1カ月半の滞在の間に、坂本の目撃談を発端に構想して描いた作品が《海の幸》です。黒潮が打ち寄せる土地に、根源的な人間の生命感を感じとった青木が、10人の裸体の男たちが海の恵みをいただくイメージを生み出しました。9月に白馬会第9回展に出品され、高い評価を得ることになります。また、点描による外光表現の、生き生きとした海景も描いていて、この海岸での体験が青木にとって実り多いものであったことを伝えます。この年が青木にとって生涯の絶頂となりました。



《眼》1904年、個人蔵(梅野記念絵画館寄託)



《海景(布良の海)》1904年、石橋財団ブリヂストン美術館



《女の顔》1904年、個人蔵

描かれた神話

—《わだつみのいろこの宮》まで 1904-07年

第3章

文学を愛した青木が、作品制作の大きな拠り所の一つにしたのが、内外の神話や聖書の物語でした。特に日本神話は発想の大きな源となりました。大国主命の蘇生の場面を描いた《大穴牟知命》(1905年)、自身をモデルに英雄的な相貌を際立たせた《日本武尊》(1906年)、そして山幸彦の海宮訪問譚を題材にした《わだつみのいろこの宮》(1907年)が代表的なものです。この時期、福田たねとの恋愛が進展し、二人の間に生まれた息子を「幸彦」と名付けたことも、青木の記紀神話への強い愛着を感じさせます。《わだつみのいろこの宮》は1907年春の東京勸業博覧会に出品され好評を博したものの、主催者からは青木の期待した評価を得られませんでした。



《わだつみのいろこの宮》1907年、石橋財団石橋美術館、重要文化財



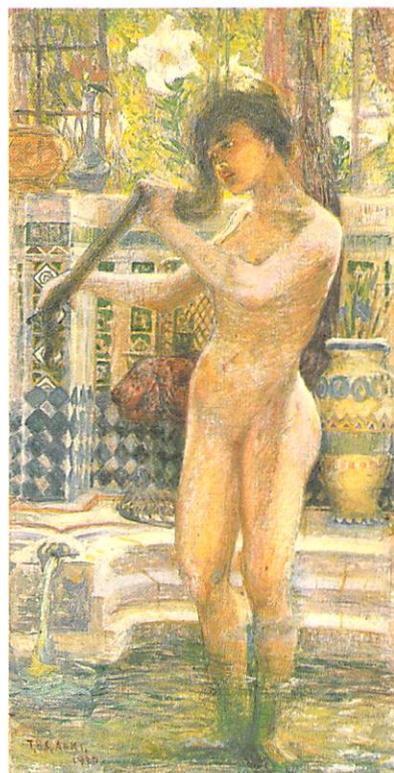
《幸彦像》1907年、栃木県立美術館



《大穴牟知命》1905年、石橋財団石橋美術館

九州放浪、そして死 1907-11年

1907(明治40)年8月、父危篤の報を受けた青木は久留米に帰省します。これが生涯の大きな転換点となりました。その後の青木は、父亡き後の家族の問題や、栃木県に残した遺児に関する福田家との問題になんら具体的解決の見こみをつけることができず、一方では中央画壇への復帰を画策しつつその夢もかなうことなく、九州各地を放浪し悲境のなかに自ら低迷していった感があります。そして、1911年3月に福岡市東中洲の松浦内科医院において亡くなります。



《温泉》1910年、個人蔵

第4章



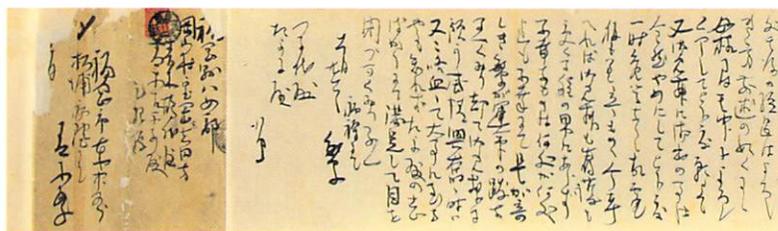
《朝日(絶筆)》1910年、小城高校同窓会黄城会(佐賀県立美術館寄託)

没後、伝説の形成から 今日まで

第5章

死を意識した青木は、1910(明治43)年11月22日、姉妹に宛て一通の手紙を認めました。そこには、自らの才能への自負、志半ばで死に行く悔しさなどが綴られています。その遺志を継ぐかのように、死の翌年(1912年)には、坂本繁二郎ら友人たちによって遺作展が開催され、またその翌年には画集が刊行されました。その遺作展を見た夏目漱石は青木のことを天才と呼び、美術史家の矢代幸雄も彼の才能に注目しました。

1948(昭和23)年、河北倫明氏による最初のまとまった評伝が刊行されて以後、作品の評価が高まるとともに、青木は小説の主人公にもなります。この章では、上記以外にも、青木の作品を残し広く世に知らせるために努めた人々に注目します。



《鶴代、たよ子宛書簡(遺書)》1910年11月22日付、石橋財団石橋美術館